

# 連合赤軍問題を 如何にとらえるか

パトリシアさんの「日本赤軍派 —— その社会学的物語」を評す

## 第一章 パトリシアさんの著作を高く評価する

—— 連赤総括運動と本書の意義について

(一節) 連合赤軍問題総括運動の現段階についていかに捉えるか

(二節) 本書の四つの特質と意義について

## 第二章 連合赤軍問題と封建的社会主义

(一節) 連合赤軍問題を如何にとらえるか —— その基本性格について

(二節) 普遍的克服対象としての封建的社会主义

—— 封建的社会主义と連合赤軍問題の諸論点・アウトライン

## 第三章 封建的社会主义はいかに克服されねばならないか

(一節) 歴史的国際的国内的封建的社会主义

(二節) 如何に克服されるべきか —— 克服にあたっての注意すべき  
点とは

(三節) 如何に克服されるべきか —— 政治路線の面から

(四節) 封建的社会主义をいかに克服するか —— その思想路線につい  
て

## 第四章 連合赤軍問題の諸問題について

(一節) 野合と封建社会主义について

(二節) 「共産主義化」の展開構造の特質と二つの面

「共産主義化」と封建社会主义

(三節) 「共産主義化」と銃撃戦の関連について

(四節) 殺された同志たちの復権と諸責任、そのあり様について

----- 死刑攻撃と闘おう

「風雪」編集委員会

￥500

## <第一章>パトリシアさんの著作を高く評価する—連合赤軍総括運動とこの本の意義について

### (第一節) 連合赤軍運動の現状を如何にとらえるか

パトリシア・スタインホフさんが「日本赤軍派—その社会学的物語」を河出書房新社から上梓された。

あの時代の問題性と栄光を凝集し、日本の戦後史、否戦前史を加えても特別な位置を占め、あの時代を闘った人々は勿論のこと、闘う人民なら全ての人々が、否全ての日本人が避けて通れないような、同志「肅清」と銃撃戦としてあった連合赤軍問題について彼女の人生の中で培ってきた、社会学的力量をフルに發揮し、否彼女の思想、人間性、生き様をこめて、その再構成に挑んでいる。

連合赤軍事件から20年が経過し、その裁判は、今年末最高裁で結審の段階に入ろうとし、被告達は死刑・重刑攻撃と対峙し続けている。この20年間、日本人民運動が逢着し、露呈させたあの壁（の突破）をめぐって、当事者、関係者を中心にしつつも、広範な総括運動が展開してきた。連赤問題とその総括運動は、あの時代性と日本人民運動の孕む、否、国際的人民運動の壁、問題性を抉らざるを得ないものであったが故に、広範で深い影響を及ぼし、その展開は、日本階級闘争の底流にして、かつ根幹に位置し一時代を経ても時折に焦点化したり、今も依然焦眉の問題としてあり続けている。運動は糸余曲折し、停滞の時期や不毛性も孕みつつも、基本的には前進し相当の成果を収めていると考えられますが、しかし、あの壁が突破されていないところからすれば、その問題をまだまだ解決するには至っていない。20年たった現在、その総括運動を新たな段階に引き上げ、実りあるものにすることが問われている。

70年闘争を鎮圧し、革命派の封じ込めに成功した権力、体制はこれを起点に、諸政党運動、労働運動、諸戦線等人民運動を体制内化し、その安定化の中で、未曾有の「繁栄」を遂げてきた。それは国際共産主義運動の路線転換や混迷・解体等にも助けられておいた。

日本人民は或る意味でこの20年間もの長きにわたって連赤問題以降、そのショックで茫然自失し、支配階級の思うがままに流されてきた、ともいえる。

「過激派」という言葉が、何か恐ろしげな異質の集団として社会からつまはじきにされてよいものかの如く市民権を得、左翼からの転向はなんら思想的、モラル的に問題視されなくてよいような風潮が罷り通っている。人々は他人のことはかまっておれず、かまうだけの思想的確信を見いだし切れないでいる。この流れに抗して、多くの人々が自覚的に政治的・思想的営為を積み上げ、闘い続けてきたのも明白である。しかし、あの壁を突破し切れないのも又明白なことである。とはいえ、種々な方面での、心ある人々、自覚的、献身的、創造的営為が蓄積され、この壁に穴をあけ、穿ち、ぐらつかせ、倒壊させる力量を成熟させつつあることも予感される。折しも、「ソ連」・東欧問題、「社会主义」の問題は、基本的問題の出るべきは出尽くし、世界資本主義は、70年代、80年代の持ち直し、

繁栄を経て、不況期に突入し、世界は天下大乱の時代に入りつつある。人民運動も再生の兆しが見えてつつある。こんな時代状況からすれば、連赤問題を巡る論争も新たな段階を画す必要がある。何がしかの形で、新しい積極的問題提起がなされていいような時代状況でもある。

### (第二節) 本書の四つの特質と意義について

この本の最大の意義・特質について述べるならば以下であろう。

本書は、この題の如く、70年安保闘争という時代的背景を踏まえつつ赤軍派の出生をもつての歴史的脈絡から、日本赤軍のテルアビブ闘争（ディル・ヤシン作戦）の岡本公三さんのインタビューを皮切りに、赤軍派や革命左派から「連合赤軍」に至る過程、そして同志「肅清」、と銃撃戦といわれる連合赤軍問題を調査、考察し、その後の逮捕、総括論争、総括運動、現在に至る裁判過程を丹念に彼女の社会学的レパートリーをフルにいかして、極力客観的に叙述し、全体像を浮かびあがらせ、学問的立場、体裁をもつて再構成を試み、相当程度の成果をあげていることである。

彼女は、コミュニケーションでもなければ、当事者でもなく、又人民の先進的闘士を自認する人でもない。彼女は日本社会の社会学的研究を専門とするハワイ大学の教授であり、イデオロギー、信念と人間存在の関連等に興味をもち、戦前の転向問題を研究しその延長線上に連赤問題を据えようとする、局外者の外国人の学者である。だから、当事者、関係者、先進的人民の主体的視覚からみれば、当然にも限界や欠陥を有するものの、逆にこのことが当事者、関係者につきものの、立場性からくる思い込みや一面性、或いは弾圧による制約等に伴う、限界から、可成り自由であり得ていること、学者としての立場方法に依拠し、丹念に時間をかけ、インタビュー、種々な膨大な本、記録類の読破、裁判傍聴、面会、種々な集まりへの参加等、執拗といえる程彼女特有の個人的体験、特殊に直接触れそれを積み重ねそこから普遍性、全體性に迫る方法を実践していること、その熱意、粘り強さは並々ならぬものである。このような努力の中で連赤問題の全体像が相当程度浮かび上がり、再構成が可成り実現されたと思う。このような試みは当事者ですら、極めて困難なことであり、彼女がこれを相当実践し、成果を収めたことに高い敬意をはらうものである。

第2に、このようなスタイルの仕事によって、彼女がコミュニケーションでも先進的人民を自認していないにもかかわらず、可成る程度科学的客観性が保証され、偏見なく時代の全体性、責任性が明らかにされ、連合赤軍やその母胎の赤軍派や革命左派、当事の武装闘争を志向した人々、当時闘った人々の全体像の歴史的な革命性を或る面で復権しこれまでの反動的風潮に竿を指し、新しい兆し、風潮を促している点である。連赤問題について書かれた第三者の本はたくさんあるが、この本はその中で最良の書と言つてよいであろう。権力、体制側は、連赤問題をここぞとばかり、あげつらい誹謗中傷を重ね、当時の武装闘争の革命的志向を抹殺せんとしたし、人民の側でも、反省総括運動に便乗し、夥しいこの志向の清算の風潮が蔓延し、今も続いている。それは丁度、日本共産党の50年武装闘争の後の六

全協の風潮とその後の日「共」の軌跡に同質なものと考えるが、本書はこの基調と異なる、意義を有している。当時の革命派の主体は、種々な思想的、政治的限界、問題点を孕み、この否定的側面は真摯に確認され反省され、清算され、克服されなければならない。しかしそれは体制側の立場、イデオロギー、行動を容認することでないし、革命的武装闘争の志向それ自体は清算されてはならず、体制と闘い、人民運動が前進する観点から、点検、反省されつつ、その志向そのものは揚棄され、保持されなければならない。当時のこの志向を全面的に良として教条的に固守することは問題外であるが、とは言っても清算されなければならないものである。あくまで否定の否定、止揚の立場、観点、方法で、人民運動の発展、前進の観点たる、唯物弁証法的観点から、否定され、かつ肯定的に保持されねばならない。連赤問題の真理に迫り、その全体像を獲得しようとするならば、是非ともこのような観点が必要である。幾度も断るが、パトリシアさんは、マルキストでもなければ、先進的人民を任する人でもない、にも関わらず、彼女の仕事は、彼女の高い人間性、人間存在についての強い興味、インタビュー等熱意と根気、社会学的力量や見識、能力をもつて、この重く、「暗い」、問題に正面から取り組むことで止揚的立場、観点、方法が確立仕切っているとは言えず、自覺的でもないにせよ、清算主義でないある種のもの、方向性がこの本にはこめられていることである。

第三として、この本は、彼女特有の社会学や（社会）心理学、哲学のレパートリーを駆使することで、事実調査を基礎に、マルキストが陥ちいりがちな、特有の用語、－彼女に言わせれば「闘争用語」－を使うことなく、清算してはならぬものを保持しつつ、世間一般の人々にその偏見を拭いつつある種の新鮮さ、馴染み深さやわかりやすさをもつて、連赤問題を提示しているのである。「社会学は伝記の接点である」「個人の体験を記した資料」をもとにして、「一つの突出した」ような特別の出来事から「普遍的な社会的プロセス」を抽出すること、意識昂揚法の適用、判断停止論、「肉体と精神の高次の結合」や敗北死の解釈、スケープゴート論、グループセラピィ、等精神分析の手法による、解釈、甘えの心理学や吉本隆明の転向論の下地まででてくる。

第四、連赤総括論争は、権力、体制のイデオロギー攻勢のただ中、弾圧下でなされ、国際・国内情勢の変化や人民運動の動向とも密接に関連し、この時間の経過に応じ、又状況の焦点に応じ、いろいろな立場の人々が主張を掲げ登場し、或る時はある立場の人が主役となり、又或る時はそれに別の立場性の主張がとつてかわつたりもした。獄にあって、直接関与せずにいた人々、その中で全体的な指導的立場に立つことを問われる人々の立場、山にゆかず都市にいて闘っていた人々の立場、当時、獄にあったが、その後出獄した人々の立場、殺された立場にたとうとしている人々、その遺族の人々、殺した加害者の指導部派の人々の立場、その中枢ではないが、そこに参画した人々の立場或いは、連赤には参加していないが、赤軍派、革命左派、創世紀の人々が逮捕された後、武装闘争を闘った人々弁護人の立場、救援する人々の立場、国際根拠地論で外国にゆき、そこで研鑽し外国人の人

民運動の営為からみようとする人々、局外者ながら連赤以降、その重大性を自覚し、その全体像を明らかにしようとした人々、etc. 歳月の経過は、これ等の立場の人々とその言い分をあらかた出尽させた。停滞期もあつたし、不毛ともいえる論争もあつたが、しかし執拗に継続された論争、運動は、それなりの役割・意義をもち、それ相応の役どころをもつていかされなければならないし、大局的にみれば決して不毛ではなく、成果があつたと思う。とりわけ歳月と裁判闘争の進展は、それ迄沈黙を余儀なくされてきた、加害者たる連赤指導部派の当事者達の言い分、事実報告－決してそれが全部真実であるとは言えないにせよ－がなされるようになつたし、これは大きな意義があつたと思う。更に創設者として全体を見れ、全体的に責任を担う指導者としての止揚的総括を問われつづける人々も、その中心がやっと厳しい投獄下の破防法弾圧の20年を突破し、これに伴う種々の制約を取り払われ、リハビリ二年を経て、もう一方の創設者とも交流する機会をもつたりし、止揚的に全体性を明らかにする条件も成熟しつつある。

連赤総括論争運動は更なる新たな段階に引き上げられなければならない。この段階は、殺された12名（14名）の立場、この限りでの遺族の立場や殺した者の立場や創設期からの全体的責任を担う立場等を基本骨組みとしつつ、全ゆる立場性を、人間性をラジカルに追及する観点、この意味で個人本位を越え、人民本位に立つ観点、現在の社会主義や資本主義の状況を踏まえ、眞にマルクス主義を創造的に発展する見地、日本と世界の人民運動を止揚的に前進させる見地から、その諸所の立場性の主張に点検を加えつつ、総括しそれ相応の役所を与え、いかし、責任の内容、在り様、形も考え、止揚的に全体性を確立することである。このことは依然として困難極まりない課題である。我々は、この課題を虚心になつて担う責任があり、使命があると自覺している。

パトリシアさんの連赤問題の全体像を明らかにし、再構成を追及する営為は、この連赤総括運動を新たな段階に引き上げる、意義ある素材となり、我々の研鑽を促す大きな刺激となる意義を有する。

## 〈第二章〉

### 連合赤軍問題と封建的社会主义

(第一節) 連合赤軍問題を如何に捉えるか——その基本性格について  
連合赤軍問題は極めて困難な問題である。

パトリシア・スタインホフさんは、そのことを「この事件は深い苦悩の源、運動が理解し乗り越えねばならない一つの遺産」といい、或は「いかに緊密な人間の条件を共有している」「普遍的な人間の同意性の上にある、かなり、面白い差異」とかとも捉えている。また「この事件がおよそ想像もつかない極端な出来事ではなく、はまり込むのがあまりにたやすい深淵」とかとも述べている。

何故困難な問題かと言えば、この問題が日本人民運動にとって、初めてとも言える、人民の権力を志向した試みであり、またそれが、七十年安保闘争という、巨大な人民運動の中にありその歴史的な発展の脈絡の中に逢着して行かざるを得ない性格の問題であったこと。突如意的に思いつかれ試みられたものではなく、そこに至る歴史的必然性、社会的・政治的・思想的基礎があったこと、人が真に現体制を打倒し、自己解放の革命を行い、新しい権力社会を樹立していく道程に、必要不可欠に横たわる問題であり、それに初めて挑戦する限り、必ず日本社会と権力の歴史的構造・特質に規定され、また主体的には当時の運動の水準、正・反の特質に規定され、それを反映せざるを得ない問題があつたこと。時代と運動の水準を体現する普遍的な問題があつたこと。連合赤軍はこの権力問題に未熟なるまま、誤った立場・観点・方法で挑戦したこと。そしてその誤った立場・観点・方法は、当時の人民運動が大なり小なり共通に抱えていた問題であり、この意味である面で、過ちを犯さずしては人が正しく権力闘争を行い得ない自己成長の過程に必然的に随伴する、そのような過ちとも言える側面を有していたからである。連合赤軍問題には特殊性もあり、連赤指導部の指導水準としての資質の問題もある。当時の運動、革命的武装闘争を志向した人々が必ずあのような過ちや闘い方をするかといえば、そうとも言えない面もある。だから日本社会や権力の構造特質の問題や運動全般の普遍的な水準問題性から厳密に相対的独自な面もみなければならない。しかし、それは決して普遍性と無関係でなく、普遍性が如何に特殊性として現れたかその関連こそ明確にされてこそ有意義である。

このような困難性の見極め、性格規定の問題追求と一体に日本社会と権力の構造、特質と運動の水準の問題性を総合した場合、第一に一体中心的な包括的

普遍的な克服対象問題は何かという議論、或はそれをどう克服するのか、という問題が提起されざるを得ないし、議論され続けてきた。

第二にこの総合的包括的普遍的対象の問題の個別分野として、(イ) 思想路線の違う党派の武装闘争志向を重視しての無原則合流・野合の問題、換言すれば赤軍派や日共（革命左派）との関連と差異、或はブントや毛派や新左翼等の人間運動との関連と差異の問題。(ロ) 「共産主義化」運動という思想運動の形を取った「肅清」の性格内容・展開構造の見極め、(ハ) 銃撃戦をどう捉えるか、銃撃戦と「肅清」は如何なる関連にあったか。(ニ) この問題に関わり合った、種々な立場の人々は、或は人民運動全体はどの様に責任をとり、またどのように評価され、復権されなければならないのか。(ホ) 連赤指導部は死刑攻撃等弾圧を集中されているが、これにどう対されねばならないのか。といった諸問題が総括運動の論点になり続けたし、それはとりも直さず、七十年安保闘争の中で、当時の運動、革命的武装闘争を志向した人々、特殊集中的には連合赤軍が逢着した実践的な基本問題であった。

(第二節) 普遍的な克服対象としての封建的社会主义、封建的社会主义と連赤問題の諸論点とアウトライン

我々は普遍的で包括的な克服対象の問題は客觀的対象問題としての日本社会と権力の構造・特質や主觀的な人民運動の歴史、到達水準を加味した場合、天皇制思想を底流とする日本の・アジア的な封建思想（やそれ以前の支配思想）を内包した社会主义思想の問題、封建的社会主义の問題と捉えている。この点パトリシアさんも内容的に再構成の基本視点にされている。そして、この普遍的問題が、厳しい権力闘争、武装闘争の中で——主体面の弱さも加わり野合や「共産主義化」の過程で反動化し、というより野合や超觀念論のエセ思想運動として現れ、封建的社会主义の問題を凝集的に噴出させ封建社会主义に一時変質したこと、或は銃撃戦は、「共産主義化」の成果ではなくその逆にこの弱点、変質化を自己批判、否定するものとして、小ブルジョア的革命性をもって、封建的社会主义を克服してはいないもののそれ故、人質問題等残すものの権力闘争として闘われたものとして評価する。封建的社会主义は、おしなべて人民運動の主体が普遍的に抱えていた弱点であり、ブントや新左翼や赤軍派にも日共（革命左派）にもあったし、殺された同志達にもあったし、森や永田等指導部派にもあった。この弱点が、武装闘争、革命権力樹立の闘い、軍事の位相の中では、政治と軍事の関係の転倒に現れ、これを媒介に、決定的致命的弱点として噴出し、野合、「共産主義化」とし、封建社会主义に変質、凝固した。

殺された12名が、封建的社会主义の弱点を克服していたとは言えないが、封建社会主义ではなく、野合、「共产主义化」は封建社会主义の対立として展開された。

封建的社会主义（或はその反動化、変質としての封建社会主义）は、日本社会と権力の歴史的構造・特質からアプローチされる面を持つ。なぜならばパトリシアさんも言うごとく、それは、日本社会と権力を「逆さ鏡にして人民の中に投影」させている問題だからである。いわば日本人民運動は封建性を、或は封建的民族性を、ブルジョア性に加え烙印されざるをえないのであるから、だから我々は、この様な問題として日本社会と権力の普遍性と特殊性の問題を何よりも重視し、それを研究し、それを如何に批判し、打倒するかの問題として考えてきた。

これは、対米従属と天皇制を特質とする資本主義として、一言でいえば、対米従属の天皇制資本主義として概括された。

これは一般的原則的資本批判の問題、社会主义革命の問題とこれを踏まえた、民主主義的変革と社会主义革命、或は民族的変革（民族独立や民族性を問題視しないものでない、民族自主化の問題）と社会主义革命の関連、総じて、革命の性格政治路線の設定の問題（革命の連續性や段階性、革命の主力軍や同盟軍の問題や統一戦線の問題）と捉えてきた。或はこれと一体の如何に人民を主体とするか、如何に人間を大切にするか、自由や民主主義の問題、差別の問題や民族差別の問題等をめぐる（革命）思想の問題として捉えてきた。

他方、主体的主観的側面からもアプローチする必要がある。これは階級闘争が尖鋭化し、武装対じに至る段階、人民の側から新しい革命的権力と社会を創出する段階、武装闘争の志向を実行化する段階での、社会主义思想、世界観、路線、戦略一戦術、政策等の問題であり、新しい社会像の問題等である。

つまり、ソヴィエト民主主義や国際主義や、統一戦線や、政府権力、革命軍建設等の範囲の問題である。

しかし、ここでも根底的な思想問題としての如何に人民を主体とするか、人民を本位とするか、人間を大切にするヒューマニズムの問題、民主主義や党内民主主義や同志愛、差別の克服、自由と平等等の問題がある。

しかし、問題は武装闘争の志向、権力の問題が提出される段階では決して一般的に提出されず、武力闘争軍事が必然的に惹起する集中化作用の中で、如何に人民本位に闘うか、如何にヒューマニズムを培い、差別と闘い、民主主義を創造するか、という問題である。革命的武装闘争、革命的権力闘争は、その志

向、実行、集中化が、決してこれらの追求を制約、疎外するとは言えず、反対に、これらの問題が実現、発揮され豊にされることに依ってのみ、実現され発展する。

しかし、僅かの原則上の思想的、路線的歪みずれ、間違いすら、それを発揮させず、権力闘争、武装闘争を敗北させる致命的危険をもたらす。

だからその際、原則的に大切なことは軍事が前面に出てくる時、政治と軍事の関係における転倒衝動が必ず出てくるのに対してあくまで政治を第一にして軍事を解決することが重要となる。その場合、政治路線と思想路線が守られ正しく応用されねばならないこと。政治路線は最低限にして、基本的な思想路線は政治路線を前提にして追求され、豊にされそれが逆に政治路線を豊にする團結の要であり、ここから軍事の問題は対処されねばならない。

であれば、封建性（やブルジョア性）を内包した政治上、思想上の欠陥、問題性、限界は決定的な問題となる。注目しなければならないのは、指導権、人民の権力への無制限な集中の衝動は、封建性やブルジョア性の弱点は、プロレタリア独裁、社会主义の名において、ブルジョア性批判の名において社会主义思想の中にある封建性を肥大化させ、指導者としての思想を絶対化させ、封建專制的独裁を必然化させ、プロレタリア独裁プロレタリア民主主義に倒錯されて理解されることである。とはいっても、封建專制や封建社会主义より、ブルジョア独裁、ブルジョア民主主義がよりましにせよ、闘いの基調、主要な矛盾はこれとの対決、止揚である以上、ブルジョア独裁やブルジョア民主主義を美化し、絶対化しても、プロレタリア人民の抑圧は増大し、社会主义への人民の自己解放の道は前進しない。問題は、プロレタリア独裁、プロレタリア民主主義の創造の道程における克服課題であり、この射程からしか解決され得ない。

### <第三章> 封建的社会主义は如何に克服されねばならないか。

(第一節) 歴史的な、国際的・国内的な封建的社会主义。

封建的社会主义を如何に克服するか。

封建的社会主义、或は封建社会主义の問題は、スターリン主義の全体主義の官僚專制の国家社会主义下での肅清や中国プロレタリア文化大革命時の膨大な犠牲、日本に於ける戦前日共のリンチ事件、小林多喜二の「党生活者」の笠原問題、ハウスキー論等の差別問題、五十年武闘の際の問題、查問にまつわる問題、新左翼の内ゲバや内々ゲバの問題や種々な差別問題、世界と日本の人民運動の歴史の中に綿々としてよこたわる。

日本における問題は、ブル民革命の不徹底、天皇制の残存、戦後民主主義革命の不徹底とその米帝に従属しての延命・天皇制的諸関係を利用しての日本資本主義の近代化の構造国際的国内的な帝国主義侵略戦争の責任解決の不徹底等、歴史的・社会的・経済的・政治的・思想的諸条件、諸要因によって、日本人民運動の中に決定的弱点として遺産され続けている。連合赤軍はこれ等の負の遺産を背負い込み、闘い、敗北した。

(第二節) 如何に克服されるべきかー克服にあたって注意すべき点とは。

それでは、封建社会主义の問題は如何に克服されるべきであろうか。アウトラインはこれ迄の展開に素描した。第一は、何よりも封建的社会主义が、人民運動・社会主义革命の途上において決定的な問題として登場すること。その意義を全ゆる側面から、闘う人民や先進的自覺的プロレタリア・共産主義者、総じて人民がよく自覚することである。これは、これ迄詳述したことである。

第二は、封建的社会主义は、あくまで封建性を内包し引きずっている社会主义の克服の問題である。そうである以上、ブルジョア的近代の成果を批判的に摂取したり、民主主義的変革を孕みつつも、あくまで社会主义を目的に、社会主义・マルクス主義の原則をもって解決されねばならないこと。封建性の弱点を重視するのは良いにせよ、だからといってブルジョア近代主義の方向に流されては根本的な解決は図れないこと。これは、プロレタリア革命の途上においても言えることであり、プロレタリア独裁権力を樹立した社会でも言えることである。換言すれば、社会主义、共産主義、プロレタリア独裁等マルクス・レーニン主義の基本内容を封建社会主义や封建的社会主义と倒錯させてはならないこと。マルクスやレーニンの社会主义の学説・世界観・路線は、人類史の生み出した最大の成果であり、封建社会主义の克服の問題も、この立場・觀点・方法で解決されるべきである。ないしは、これを創造的に発展させる見地で解決されるべきである。

レーニン主義のプロレタリア（資本主義批判・ブルジョア民主主義批判・社会主义革命の）ヘゲモニーの下で、民主主義的変革（民族主義的変革）と社会主义革命をどう統一するか、と言う問題である。

或いは、資本主義批判・社会主义体制・プロレタリア独裁の下、世界革命・継続革命を

人民本位で追求しつつその中で、他方で、封建性をどう自己克服してゆくか、という問題である。

それを我々は、「封建社会主义と現代」（塩見孝也著・新泉社）の中で原則性と近代化的統一とも概括した。

(第三節) 如何に克服されるべきかー政治路線の面から。

日本の問題で言えば、日本資本主義社会と権力の歴史的構造・特質について、またこれに伴う革命の性格、政治路線について再照射し、調査研究することであり、眞に日本の現実にあった政治路線を確立することである。

このためには、マルクスの「資本論」や原則的資本主義批判、レーニンの帝国主義論は必要不可欠な下地にならなければならぬ。戦前・戦後の日本資本主義論争の再点検も必要である。この点は詳述しないが、戦前資本主義が絶対主義的天皇制権力の下で発達してきたこと。この天皇制的諸関係と権力は戦後大打撃を受けたが、ブルジョア民主制に質を変えた象徴天皇制として延命・残存し、戦後もその諸関係を引きずり、ブルジョア権力の中に枢要の地位を占めていること。

日本人民は、天皇制に対決する民主主義的変革運動に不徹底であったこと。或は、この天皇制は米帝に助けられ延命したことで、対米従属の鑿になっていること。

また、戦後日本資本主義としての権力は対米従属下で復活し膨張したもの、自立はしている、民族独立は実現したと言って良いが、民族的自主性は獲得していないこと。この自主性を疎むものとして米帝や天皇制があること。

日本は高度に発達した資本主義国であるし、その権力は、基本的には日本独占資本が握っている以上、革命の基本性格は社会主义革命ながら、日本の権力構造の中には米帝・米軍が存在し、日帝権力は縦体として米帝の従属下にあること。対米従属と天皇制の問題を踏まえた場合、社会主义革命はその途上に於て反霸権・反侵略と一体（この意味で抑圧民族を自覺したうえでの革命的祖国敗北主義、国際主義の見地を保持しつつ）の民族自主の民族的変革や民主主義的変革を横たえる。

日本社会主义革命は、民主主義的・民族自主的変革の課題を解決しつつしか発展・実現してゆかない。換言すれば、日本社会主义革命は、民族（自主的）的変革、民主主義的変革を内包しつつ存在すること。社会主义革命ながらその中に民族的・民主主義的変革をあわせもちつつ、一個二重に展開されるということである。

日本革命は、反米民族自主変革や反天皇民主主義変革として、これを特別な位置にしつつ、社会主义革命として展開してゆくということである。民主主义思想も民族主义思想も新しい内容として発揚すること、そう當為されるべきである。

ここから種々な戦略・戦術、政策が提出されて来るが今は語らない。一つだけおさえておくとすれば、我々は反天皇民主主義変革の大切さはこの間言い続けて来たし、幾ら言い続けたとしても言い足りない問題であるが、この20年間の人民運動の前進がある程度獲得

したものとも思っている。今一つの民族自主化の問題は、まだほとんど自覚されてないこ  
と。我々はこの問題を非常に重視しているし、ここに日本人民運動を政治的・思想的に前  
進させる一つの重要な鍵があると思っていること。この点は機会を換えて述べる。

二つはこれらの問題は、レーニンの言うプロレタリアヘゲモニーの問題がーそれはプロ  
レタリア本位・人民本位ということであるが、或はプロレタリアート 資本主義下でプロ  
レタリアートが一番非人間化されているのに対して、人間らしく生きたいという要求を本  
位とすることでもあるがー解決の要石であり、この理解が大切なことを指摘しておきます。

#### (第四節) 封建的社会主义を如何に克服するかーその思想路線について

正しい政治路線の創造的確立の問題の重要性と同時に正しい思想路線の問題がある。こ  
れは対象分析、政治路線と一体のものもあるが、相対的独自もある。この領域について(イ) 個人本位を克服して人民本位になること、人民を主体とすること、そのこととの関  
連で人民に奉仕する思想の涵養の問題。(ロ) (イ)と同じことだが、人間を大切にすること  
人間らしい生き方、ヒューマニズムの創造的な思想的営為、プロレタリアートは、資本主  
義生産関係から規定される階級性を保持しているものの、それは先駆的に考えてはならず  
その階級的能力は、一番抑圧されているが故に、階級として連帶して、一番人間らしく生  
きたい欲求をもつことを自己解放の原動力とすること。この意味でヒューマニズムと階級  
性は切り離して考えられない。(ハ) (イ)・(ロ)は政治的には、プロレタリア人民を本位とする  
諸個人の自由や平等と連帶を要とする民主主義政治制度の創造的創出、ソヴィエト型民  
主主義やコンミューン原則等の継承と発展、複数政党制だが内容上、人民本位の世界革命・  
継続革命を追求し続ける共産党の一党指導制の問題。封建的(半)植民地国、或いは後發  
の発展途上国での社会主义が、封建制から社会主义制に至るも、資本主義を一挙には飛び  
越えきれず、世界革命を射程にしつつも、国際情勢の種々な段階で、意識的に開放・改革  
をプロレタリアヘゲモニー・継続革命下で如何におこなうかの問題。(ニ) 革命後における  
世界革命やプロレタリア国際主義の連帶との関連での民族自主の問題。(オ) 民主集中制の  
内容的・創造的復権、党内民主主義と同志愛の涵養の問題等、以上六点を差し当たってあ  
げておきます。

(イ) に関して言うならば、マルクス資本主義批判を我がものにしつつ、それを思想論的  
に捉え人民本位主義を定立すること。革命はあくまで人民が主体であり、如何に人民を革  
命主体に高めあげるか、人民本位化の思想と原則的資本主義批判とこれを基礎とする帝国  
本主義批判、現代帝国主義批判、そして日本資本主義批判はメダルの表裏であり、自己を  
共産主義者にし、人民を革命主体にする為の基礎、出発点である。我々のプロ革派時代の  
小ブルジョア革命性の克服、プロレタリア革命主義の確立という提起も、そしてその為の  
賃金奴隸制批判を視座とする資本主義批判の営為もみなこのこととしてあった。

(ロ) に関しては、ブルジョア近代の批判的摂取も必要でもあるが、マルクス主義哲学の  
領域における人間についての研究、客觀主義的唯物論やその裏返しの観念論的意識のみの

「主体的唯物論」でもない、人間中心の、人間を主体とする唯物論と弁証法の確立・創造  
の問題が大切と思っている。

## <第四章> 連合赤軍問題の諸問題について

(森氏、永田氏、坂口氏、植垣氏は文中敬称略)

### (第一節) 野合と封建社会主義について

連合赤軍問題の普遍的包括的問題としての封建的社会主义については述べた。今度はこの普遍的包括的問題が如何に連合赤軍に貫徹していったかについて述べる。

連合赤軍問題の発生には幾つもの階梯があつたが、その最大のものは、政治路線、思想路線の違う党派（の一部）がこれを無視して軍事、「銃による殲滅戦」を強調して野合したことにある。その前に永田達革命左派に於ける向山、早岐さんの処刑が封建的社会主义の誤まちとして存在し、それが引き金になつてゐる要素も重視しなければならない、森に示唆された、というのも事実であろうが、判断主体はあくまで永田本人であつたし、このことが総括されねばならないし、革命左派からも、スターリン肅清の肯定的風潮の中、整風の提起はあつた。

中国プロ文革に於ける、自己批判糾弾大会、頭を丸坊主にしてのひきまわし、知的水準と一体のやみくもな傷害や殺人、誤審等、中国革命を真似ての山岳小社会主义の誤まち、封建的社会主义が毛派にあっては直輸入されていた面も見るべきである。中国プロ文革の総括も問題となろうが、それは今は描く。人民本位の観点にたてば、人民のいる都市にあって活動するのは、日本社会の性格からすれば、原則上の問題であり、この点でも、軍事場の観点から山岳に逃亡したことは重要な問題である。

我々は、赤軍派の脈絡から再構成を追及されるのを、光栄と考えているが、又連赤問題の直接の責任は永田のみに帰せられず、森と永田に対等に最高責任があるとかんがえるが、そして、パトリシアさんが森を一つの軸において「共産主義化」を調査・研究されているには敬意を表する。しかし総じて、パトリシアさんの封建的社会主义は、赤軍派、森を中心みていて、日共（革左派）の側から、永田からみてゆく視点が弱いことは、この本の最大の難点であろう。プロ文革の封建的社会主义の流入は日本の天皇制的封建社会主义とも融合しているのである。

日本毛派の政治的、思想的総括や50年武装闘争時の総括も必要なのである。

新倉に於ける共同軍事訓練から「新党」（「連合赤軍」）結成に走っているが、この段階で、小ブルジョア革命主義の極左主觀主義の路線から「銃による殲滅戦」が引き出され、政治と軍事が転倒してしまい、軍事至上から、路線無視の野合が行われている。それぞれ二つの党派には歴史があり、思想、路線があり、これに伴う指導体制や作風がある。路線を軸にそれぞれの構成員は団結しているのであり、その路線のいずれが正しいか、否かは今は描くとして、このような党派が合流するには、一両者が両者の路線の良い面を学び合い、摂取するにせよ、一方が自己の路線を捨てて、原則的な党内討論を経て、時間をかけて合流する以外にはない。構成員にとっては、これを基準にして、伝統をもち思想的、政治的理論的營為をやり、人に奉仕しようとしているのである。このような革命政治組

織の団結の基準を崩した場合、構成員が理論的營為が出来なくなるのは当然のことである。

だからこそ、この兆候を察知し川島氏等獄中は路線無視、放棄を強く主張し永田等を批判していたのである。これは全たく正しいことである、何故このような非合理が行われたのか、両派が権力に追い詰められ、孤立していたことと革左の場合も考えられるが、又種々の指導権の問題もあるが、中心は主觀面では、森や永田が軍事の自然発生性に拝跪し、政治と軍事を転倒させ、政治を軽視したことである。政治これは人民を主体として、あくまで人民本位に鬪うことであり、政治路線を大切にし、それを活かすことを活力の源泉とする。森の方も又、永田が社会主义革命路線に接近したとしても、そのことを安易に許容せず、政治的、思想的に一体化する着実な努力が必要である。獄中では論争してみて、政治路線的には一致しないことが明瞭になっていた。そして、この政治と軍事の転倒、軍事の自然発生性に拝跪させた要にプチブル革命性と個人本位主義と一体のものである封建的社会主义の問題があつた。指導権の集中を絶対化し、民主主義的集中制をとらず、軍事を名文にして、指導者のある種の封建的な一人決めの個人独裁をやつたことである。

このことが容易に下部に受け入れられるか、許容を余儀なくされたのも軍事の自然発生性であろう。赤軍派もそうであるが、革命左派の場合獄中と獄外の対立、内部対立が尖鋭化し、意見書も山にとどけられていたのであるし、意識的な路線無視に反対する反対派も形成されていたのである。

路線、思想、作風の違う党派が野合した場合、団結の基準がない以上、内部団結が保てず、団結が揺らぐのも当然であり、それでより一層軍事が強調され、団結の基準を路線ではない何か別のものつまり、超観念的なエセ思想運動を「革命兵士になる為」と称してデッчиアゲてゆくのは必然である。それは、内部的には封建的な軍事ボナパルチズムと言える個人独裁へと至らざるを得ない。又対外的には、獄中や都市との関連をもつ同士を反対派と危惧し排除してゆくことになる。「共産主義化」の対象の設定は、まったくの偶然の思い付きではなく、この野合反対派ないしは、その危険をもつ人々の統制、排除の下になされていること。加藤さんは意見書をもっていっており、救対として獄中とコンタクトをもっていた尾崎さんがまず「共産主義化」の対象とされていった。

最初は、殺人を意識化してはいなかつたが、その後すぐ「敗北死」などという名文で正当化されている。路線無視の軍事至上の野合故に、森と永田の信頼関係も形成されず、二人の個人独裁体制も相手の勢力を弱めるためとして、たがいちがいにバランスをもって、「共産主義化」の対象が設定されていっているのである、これも偶然の思い付きではない。

パトリシアさんも指摘している如く「共産主義化」には何等の思想的原則、基準もなければ、科学的方法段取りもない、あり得ようはずもない。野合を糊塗する為に捏造されたのであり、観念の産物でありこれ自体は単なる思いつきの寄せ集めであつたからだ。そこに一貫性があるとすれば、封建的な専制関係とそのイデオロギーである。観念的な思想運

動であるが故に、この思想運動は、とどまるところを知らず、自己滅却にまでいたらざるを得ないのである。

パトリシアさんも、野合の問題については触れている。しかしここに連合赤軍問題を発生させる、最大の閑門、ルビコン河が横たわっていた問題とはとらえ切れていない。これがパトリシアさんの再構成の第二の難点であろう。ここに唯軍事主義、極左主觀主義路線、個人本位の跳躍点があり、批判と自己批判の唯物弁証法的な意味での自己点検や整風運動とは異質なものに変質する、閑所があったこと。超観念的なエセ思想運動としての「共産主義化」なる反動的思想運動に「党内」思想運動が転落する閑所があった。

更に、何故急進的思想運動だからといって、同志を「総括」と称して、死ぬのが判つてゐるのに総括をかけてゆく秘密もあつたこと。共産主義化は表の面をみれば、反動的な観念的思潮運動であつた、しかし、他の裏の面では、間違った建党路線、つまり誤った権力闘争に伴う、これに反対する人々の抹殺の側面があること、この側面と対にトータルにみない限り連赤問題は解明されない。

尚、赤軍派が7/6事件をもつて、連合ブントと訣を分かったことと、この野合を同一視してはならない。何故ならば、赤軍派の分離は、第二次BUND（ブント）の路線、「過渡期世界論」の枠内のことであり、政治路線を無視したり、野合したりしたものではない。ブント全体の有す小ブルジョア急進主義（小ブルジョア革命性）や封建的社会主义の思想的弱点を有してはおれ、—これは、これで総括すべきであるが—野合したのではなく、第七回大会路線・「過渡期世界論」の忠実な継承であり、長期にわたる党内論争を経て、第二次ブントから分派していったものである。ここには非合理的な抹殺行為もなかつたし、超観念的な内部肅清もなかつた。唯軍事主義や封建的社会主义も傾向としてあったであろうが、又党建設上からみてすぐなくからぬ弱点も有していたが、それが基本的な組織の機軸ではなかつた。分派すること自体が誤ちではなく、誤ちは組織が依つてたつ路線を、軍事至上や個人本位の為に、封建的社会主义を極大化させたことである。

永田達は「共産主義化」運動の反動性についてそれを封建的社会主义として自己批判している。これは、我々とともに勝ち取ったものでありよいことである。しかし、それは自分達指導部派がなした、路線を無視し、野合したという、原則上の誤ちの問題との関連で主体的に、自己が果たした主導的な役割りの意義について総括しようとしている、むしろ自己合理化の為に、問題を一般化し、政治路線や組織路線と切り離した思想路線、思想問題としてのみ明るみに出そうとしている。

そればかりか、野合は正しく革命的志向であつたかの如く、「党派主義」なるものをあげつらい正当化しようとしている。これは封建的社会主义、唯軍事主義の極左路線の総括否定、清算の不徹底であり、「肅清」=同志殺しの自己合理化、居直りと責任転嫁である。路線無視の野合にこそ、最大の封建的社会主义があつたこと、この誤った建党路線、誤った権力闘争に封建的社会主义の反動化、個人本位の封建社会主义は凝固していったこと、

反動的「共産主義化」運動のデッヂ上げはここが出発点であり、「新党」の出発点そのものが、反対派の抹殺としてあつたこと。

永田は「党派主義」なるものを総括の一つの軸に据えようとしているが、そして、この用語概念は永田の造語であり、全く曖昧なものであるが、セクト（党派）絶対化、或いはそれからくるセクト主義、或いは組織物神崇拜化の含意とも思える。対的には官僚主義をさすのかも知れない。そしてこの主張は、連赤以降、とくに70年代中期以降、猖獗を極めた分裂につぐ分裂、小党派乱立と内々ゲバ・内々ゲバの常態化、しかも、その小党派が何の政治生命力ももたず、むしろ、大衆・大衆運動の利益を守らず、むしろその前進の桎梏となる状況・風潮に敏感に反応して主張された側面も有す。我々もこのような状況を良しとしないし、何も生み出さない、存在するだけ有害な組織は無いほうが良いとも考えるが断じて、当時の赤軍派と革命左派全体が党派主義であったとは思わない。むしろ活力を有していた組織であると考える。またそのような組織が生命力を失ない形骸化しているとしても、解体したり、解散して政治思想抜きに野合して良いとは考えない。このような事態も、基本的には政治・思想路線の活学・活用・運用であり、どのように政治思想内容をいかし活性化してゆくかによって原則的に解決されてゆくべきと思う。セクト主義や官僚主義としてある害毒の除去も、組織解散や路線抜きの野合や連合では解決つかない。謂んやレーニン主義の組織路線そのものが原則的に誤っているなどといった結論はでてこない。レーニンの「何をなすべきか」の巻頭が「組織的問題は政治的・思想的問題である」という言葉で飾られている如く、セクト主義や官僚主義の発生は、その党派そのものの政治・思想路線の検討、それが活学・活用され、生きた生命力としてなっているかの観点から点検されるべきである。永田は革命左派や赤軍派が「党派主義」というが、「党派主義」として組織内の団結を生命力あるものにつくりきれず、対外的にも政治的・思想的影響力をなくさせ、セクト主義に陥らせさせたのは、路線を無視し、政治討論を軽視し、唯軍事主義に陥っていた、革命左派内部の永田派に於ける永田の指導の貧困であり、森派に於ける森の指導の貧困である。とりわけ、永田派の永田の唯軍事主義・路線軽視の指導上の問題である。唯軍事主義・路線軽視から生まれる組織上の危機を、永田は革命左派（永田指導下の）に於いて自己防衛・組織防衛の為に、同盟員の「作風」の批判、「思想闘争」として野合以前もやってきたし、その極限が向山・早岐さんの処刑であった。向山・早岐さんの処刑の誤ちを、自分が組織防衛の観点から行ったのを反省するのは良いが、それでもって組織そのものをつくるのが誤ちであったなどと、自己の政治思想内容を抜きに語るのは、トンデモない誤ちである。

にも拘らずの危機の中で、遠山さん批判などをやりつつ、この「個人批判」を赤軍派にも拡大しつつ、野合に走ったのである。

永田は組織における政治路線・思想路線の重要性をわかってないか、わかっていても無視しようとしている。何故そうかといえば、自己の政治軽視の唯軍事主義、これと一体の

個人本位、封建的社会主义が決定的に路線放棄の無原則野合に凝集したこと、そこにおける永田（森）の独自の決定的な役割・責任を認めたくないからである。換言すれば、野合の問題を素通りして、急進主義的な思想運動としての「共産主義化」につなげたいか、そうまで言わなくても、封建的社会主义の反動的思想運動につなげ、問題・責任を一般化し革命左派や赤軍派に、更には新左翼の責任に解消したいのである。確かに封建的社会主义は、赤軍派にも革命左派にもブントにも毛派にもあった。左翼全般にあった。この意味で我々は責任を回避しないし、これまでも総括し続けてきたところである。しかし、それは封建社会主义ではないし、社会主义思想に含まれる封建性の問題であっても、そして、それが封建社会主义に反動化し変質する地盤であっても封建社会主义ではない。封建的社会主义から封建社会主义には、極左路線・個人本位と一体の唯軍事主義・路線無視の野合という閑門があったのである。質的跳躍点があったのである。この質的跳躍点を経る中で、思想運動や整風運動は原則を失い、変質していったのである。当時、一部に「ゲリラから党へ」というレジス・ドブレの「革命の中の革命」を無批判に取り込んだ意見もあったがそんな人でも政治路線を軽視してはいなかったし、ドブレ自身、キューバ革命を正確に理解してなかったし、レーニン主義組織論を理解してるわけでもなかったし、それは当時にあっては、まさに軍事の自然発生性に拝跪した、唯軍事主義者の讃美するものであった。これがもてはやされた理由は、革命的政治組織にとって軍事が緊要の問題であり、軍事は軍事として、新しい分野として、政治を第一にしつつも独自の分野として研究され、その能力を高めねばならなかったからである。このような意味で政治を第一にしつつ、政治指導者が軍事指導者になることが要求されていたことがある。「ゲリラから党へ」が、主体建設を捨象して言えば、このような発展過程は描かれるにしても、そのゲリラの団結・主体形成は政治・思想路線であり、路線抜きにはあり得ないのである。

永田は自己の封建的社会主义や封建社会主义が、野合として特殊的に凝集したこと、そのことが、反動的思想運動の「共産主義化」、イコール間違った建党路線としての「肅清」=同志殺しの出発点であり、基礎であったことを隠すために、無原則野合を「党派主義」批判なるものと絡めつつ、新しい革命的試みとかとして美化しているのである。これは責任回避・転嫁である。

セクト主義と無原則野合は、その組織の依って立つ路線の堅持と活用・活用に於ける生きた政治指導の問題とあくまで一体であり、永田は向山さん、早岐さんの処理をセクト主義と総括し、他方で、その裏返しとして野合を、新しい政治・軍事グループの革命的試みとして美化し、一転、同志殺しは今度は森やその理論のせいだと言うのである。いつの間にか永田の責任は消えてなくなるのである。

政治・軍事上の共闘と党建設はあくまで区別されなければならない。

組織の合流は共闘とは基本的に区別され、それ自体、政治・思想上の路線問題として検討されてゆかねばならない。この原則上の問題が、唯軍事主義・個人本位と一体の封建的

社会主义思想の故に混同され、無視されたのが、同志殺しの悲劇の直接の第一の原因である。

だがこの合流の問題は、全く検討に値しない単なる恣意的な誤ちかと言えば、永田とは違って、別の観角から見れば、検討に値する意義ある問題を含んでいると思う。それは、新左翼系と毛派、或いは日共（日「共」系）の路線討論を原則的に行なったうえでの單一党建設の問題である。この観角からみた場合、我々は、日本左翼における社会主义革命路線と民族民主主義革命から社会主义革命の路線との戦後の論争は、未だ完全には解決されていず、この60年代以降の経験と論争を総括し、新しい段階に引き上げられるべきと考えている。この点については<第三章>に於いて問題提起した。

我々は、この問題意識を70年以降一貫して持ち、研究し、試行錯誤してきた。そして、一応のまとまった総括段階に達した。永田は「党派主義」批判などといった自己合理化をやらず、この点を考えつつ、「新党」志向を今一度考え直すべきでなかろうか。

## （第二節）「共産主義化」と封建社会主义について —「共産主義化」の展開構造の特質と二つの面

パトリシアさんは「共産主義化」の発展過程を克明に、「意識高揚法」や「グループセラピイ」等の手法の観点や、スケープゴート論の理論などから分析している。また、森の「敗北死」や「同志的援助論」や「肉体と精神の高次結合」等の「理論」を、この観点から紹介している。これはこれで「共産主義化」の全体像に迫る思想的機軸であり、正しい。とりわけ「肉体と精神の高次結合」の紹介などは、植垣などの分析、弁論によったものであろうが、我々の知らないところのことでもあり、貴重であり、反動的な観念的な封建社会主义の思想運動の性格が如何なるものであったかを知るのに興味深い。「精神と肉体の高次な結合によって、肉体の限界を乗り越える、という禪の思想に基づいた武士道の精神を、共産主義化の観念にあてはめ……、この考えは戦時中の日本軍国主義と酷似している。熱意に燃えた大勢の軍人達は、このような観念を信じるために、敵国が軍備において勝つしようと、日本の精神力で、それを打ち負かすことができると主張したのである。」と述べつつ「日本の文化構造に深く根ざしている」という彼女の主張は、十分うなづける。「死のイディオロギー（Deadly Ideology）」とするのもうなづける。これこそ封建社会主义、天皇制社会主义の思想的エッセンスといえるし、賛成である。また、塩見同志がただ一度、当時の意見を採用して一語書いた「共産主義化」という言葉と関わりないこともあきらかとなっている。また、封建社会主义の反動化としての野合=新党結成を第一段階として、次の段階として「共産主義化」の段階が、尾崎さんの死を経て質的に移行したこと、この段階における森理論のはたした甚大な役割もわかる。しかし、これまでみてきたように、「共産主義化」の過程・構造・性格はもっと合理的で全体的・構造的に説明し得ると思う。

森のはたした役割やその理論・イディオロギーはわかるが、それでは永田のはたした役割はどうなっているのか。反弾圧の観点やパトリシアさんの立場を差し引いても、ずいぶんと片手おちを感じざるをえない。また、「共産主義化」の過程を森理論一色で説明し過ぎている。「理論」が過大評価され、それを生みだした実践主体・人間関係の分析が弱く、理論のひとり歩きが感じられる。実践主体の関連で永田の役割は大きいし、そもそも森の理論づけは、永田の2名の処刑、遠山さん批判を出発点にしている。永田達は反弾圧の関連もあり「森に永田はつき従っただけである」といっているが、この点、我々は事実が違うと主張してきた。森は連合赤軍問題の責を一身に背負い自殺したが、我々は彼なりの立場からの弁明（擁護）の機会が、つくられることを望んでいる。これまで述べてきたように、「共産主義化」は、表の面で反動的思想運動の顔をもつと同時に、裏の面では、誤った建党路線に基づく、誤った権力闘争の顔をもっていること、この両面を一つのこととして統一的にみる視点が必要である。

軍事至上の野合故に、封建的社会主义が反動化・変質し、この矛盾を糊塗する為に、超観念的な反動的思想が持ち込まれたり、封建的、軍事ボナパルチズム的独裁が生み出されたこと、野合反対派に対する「肅清」の側面、野合故に内部統一ができず、次々に反対派が生まれ、森と永田の間にも矛盾が解決されず、互いに他方の勢力を弱める形で、肅清対象が設定されていっていること、この野合故に「共産主義化」の進行は、団結を獲得できず、自滅の自己滅却にまでいかざるを得なかったこと、このへんの諸点は、しっかりおさえらるべきと思う。

また、植垣があまりにも美化されすぎて描かれているとも思う。植垣は指導部派の中核にあり、森（や永田）を理論的・政治的にも支えた片腕的位置にあり、その位置・役割は、坂口や山田さんのような消極的な反対派としての異質な位置ではなかったこと、大槻さんの問題等も含めて、森にのみ責任を集中させず、主体的に自己の封建的社会主义や封建社会主义の反省が必要であろう。永田を弁護するのもよいが、反弾圧の観点を強調するのもよいが、また、赤軍派や時代総体の責任を問うのもよいが、そこには原則があってしかるべきであり、12名（14名）の立場がなければならない。なお、「共産主義化」の過程で、女性解放の問題は反動的に提出されていたが、この問題は封建的社会主义と女性解放の問題として特別に論究されるべき、位置と比重を有していると

思うが、最近の永田のこの問題についての論及は十分肯定的に受け止め得ることを指摘しておく。

### （第三節）

#### 「共産主義化」と銃撃戦の関連について

銃撃戦は、「肅清」（同志殺し）の成果の上に築かれたのではなく、その否定、自己批判を力として実現されたことは、パトリシアさんの坂口の紹介の中でも明瞭になっている。我々もこの観点に立ち続けてきた。この観点に立ってのみ、人質問題などあり、諸手を挙げて支持するわけにはいかないが、封建社会主义が自己批判され、封建的社会主义や小ブルジョア的革命性を越えてないにせよ、その革命性に復帰している点で評価し得る。我々は「肅清」を肯定するような無反省・無総括な教条派の如く、銃撃戦を諸手を挙げて支持するわけにはいかないが、パトリシアさんの「銃による殲滅戦」の章にも明瞭なように、「遺族の立場」と称して、「ギャング団が追い詰められて籠城し、銃撃戦をおこなったのと同じ」といった見解には立たず、そこには小ブルジョア革命性ながら、人質の扱いにも苦慮がなされ、妙義越えや籠城戦にも発揮された、数人の連合赤軍の驚くべき奮闘ぶりに、小ブルジョア革命性ながら、敬意を表すものである。「肅清」と銃撃戦を小ブルジョア革命主義の負と正の両側面といった形で、機械的に二分して分析する立場もとらない。

#### (第四節) 殺された同志たちの復権と諸責任、そのあり様について

##### ----- 死刑攻撃と闘おう

殺した者が殺されているといった形で殺された者と殺した者の境界を曖昧にするか消去する観点は批判されなければならない。無道に殺された者は復権されなければならない。確かに殺した者が殺されている事実もある。しかし、最終的に殺された者と殺したものとの境界は厳然としてある。殺された者が殺したものを見れば、その性格がやや複雑であるにせよ彼、彼女らが封建社会主義の元兇でもなければ主因でもない。置かれた状況の中で、従わざるを得なかったということであり、結局は、「共産主義化」や「新党」指導部に反対していた人々である。この根本的性格は、封建的社会主义や小ブルジョア革命性を残しながら、無私で個人本位と闘い、人民本位に生きようと願っていた人々であり、殺した側の中核、指導部派、特に森・永田は封建社会主义に反動化・変質していったのである。

この境界は、如何に反弾圧の面や銃撃戦の面や歳月の経過の面が加わろうと厳然とあるのであり、絶対に曖昧にされてはならない。

確かに森・永田以外に総括の危険が最終局面で生まれていたかも知れないが、森・永田につき従っていた指導部派の者は植垣のように容赦され、これに反対していたものは抹殺されて行っているのである。この境界、正邪を曖昧にするなら事件の本質・性格は捉えられないし、復権の問題、責任の有り様も、全く曖昧になるし、今後への教訓化も曖昧にされてしまう。

指導部派の「共産主義化」における所業は徹底して、封建的社会主义の反動化の所業として弾劾され批判されなければならない。殺された人々は、この人々を完全無欠の革命家として持ち上げる必要はないが、封建的社会主义の弱点をもっていたとはいえ、必死で、心から個人本位と闘い、人民本位に生きようとして闘った革命者として復権されなければならない。

我々は遺族の立場にある人々の見解に全面的に与するものではないが、この点遺族の人々の見解、批判は真しに受け止められるべきと思っている。

この点は反弾圧の面で種々な配慮はなされても、基本的な問題として曖昧にされてはならない。12名の人々は人民の先進的闘士・革命家として復権され、我々は12名の立場に立ち、その犠牲を受けとめ、その遺志を継承し、その抱えた矛盾を止揚すべく奮闘すべきである。

生き残った人々は、先ず12名の立場に、止揚派としてその立場に立つこと。

指導部派は、12名(14名)に対して封建的社会主义の反動化として、直接の責任をとり、止揚志向をもって、弾圧と闘い、生き、考え続けるべきである。直

接の責任を取る立場を通して、全体は、総括的普遍的責任もいい続けるべきである。

我々は、時代の責任や当時の運動総体の責任、欠陥、限界を指摘し教訓化する志向を支持し、我々もそうしてきたが、しかし指導部派は直接の実行主体として、それを自分の具体的な思想、行動の自己批判を通して明かにすべきである。

なによりも日本資本主義とその権力に対して止揚派として、個人本位と闘い人民本位で闘い抜くべきである。

弾圧から解放され生き残った当事者、関係者は12名の立場に立って止揚派として闘い抜くべきである。。また、今も弾圧を受けている、指導部派に対して、立場の相違は厳とし、その限界や問題点、欠陥に関しては、批判も留保しつつも、彼らの過ちも、根源に於て、体制とあの時代の人民運動の水準に規定されたものとして、その責任を極力共有し、共に連帶して闘うべきである。全体的普遍的な問題、責任と、特殊個別の直接責任は厳として区別されなければならないが、とはいえた全体的なものと直接的特殊個別的な問題、責任には関連もあり、指導部派の責任も共に背負うべきは背負い、彼、彼女等にのみ、責任を転嫁してはならない。

この立場・観点・方法は、旧赤軍派や旧革命左派に留まらず、新左翼、毛派も含め、日本人民、民族全体の責任である。

パトリシアさんは、連合赤軍指導部派が決して、「邪悪な心を持った人々」ではなかったこと、「普通の人々が余りにも陥り易い深淵」とかともいい、指導部派も含めて、その人間性に於て肯定的な評価を下している。

武装闘争の志向はあの時代、階級攻防を人民運動の歴史的発展の必然として産まれたこと、そしてその志向は、日本人民運動にとって、未踏の問題であり、大きくみれば、この志向の実行は、この志向を真剣に追求すればするほど、それに伴って発生するある種の不可避な面をもつ過ちだったといえる。それは、日本人民運動の正と反、負の遺産をモロに発現させざるを得ないある種の必然性を伴わざるを得なかつたとも言える。

我々もまた彼、彼女等が善意で真しな人々であり、我々と全く同じ人間とも考えている。

そのような人々があのsuchな過ちを犯したが故に、我々はこの二十年間、総括運動を担い続けてきたのであるが、これまでの展開も踏まえた上で総括するならば、彼、彼女等が、人民運動の水準に規定され、真しに闘おうとしたが故

に、根本的にはその未熟性故に、その真しさが、逆目となって現れざるを得なかつた問題であること、であれば、「連合赤軍」の過ちは明らかに人民内部の矛盾であり、その解決も人民内部の問題として正しく処理さるべきであり、決して権力に裁かしてはならないこと。権力には裁く資格も能力もないこと、そのような権力の死刑攻撃は決して許してはならないこと、この闘いを死刑制度廃止の闘いと共に闘い抜く必要があること。

この攻撃を許すか否かは、実践的な総括運動の分岐点とも考えられるし、この許容はこの総括運動にとって大きな打撃、我々は人民の思想的・政治的敗北、なに程かの死として、ながくその損失は固定化されるだろう、と考える。しかし、権力もまた、簡単に審判は下そうとも実行し切れない弱点もあり、勝利の可能性もなくはなく、我々は総括のさし当たっての実行目標の一つとして全力でこの闘いに取り組む決意である。パトリシアさんの労作は我々のこの決意を一層打ち固めさせてくれた。感謝の意を表するものである。

1992.2.11 (完)

風雪50号（連赤問題特集号）	1992年2月20日	¥500
発 行	風雪編集委員会	
	新宿区高田馬場 4-39-4 202	
郵便振替	東京 7-70588 SQ舎	
電 話	03-3364-1686	